



追悼 生田正輝先生



生田正輝先生と新聞研究所

—そしてメディア・コミュニケーション研究所—

山本信人

生田正輝先生は2012年5月7日、89歳の生涯を終えられた。生田先生の生涯はまさに慶應義塾大学での歩みであった。同時にメディア・コミュニケーション研究所の前身である新聞研究所の設立と発展は、生田先生なしには語るができない。

生田先生は1923年2月6日、兵庫県丹波市柏原町でお生まれになった。慶應義塾大学法学部政治学科に入学後、学徒動員で戦地に赴かれたこともあり、卒業は1947年9月であった。学部時代は米山桂三先生の下で、社会学、世論、マス・コミュニケーション論などを学ばれた。卒業後すぐ翌10月から法学部助手として研究の道に進まれることになった。1951年に助教授、1957年に教授に昇進され、1960年から61年にかけてはハーバード大学で訪問研究員として研鑽を積まれた。

1946年に米山先生が主導なさり新聞研究室が開設されると、生田先生は自ずと新聞研究室の運営に深く関わることになった。1949年4月には生田先生は新聞研究室主事を兼務された。新聞研究室は1961年に新聞研究所と改組になった。1962年から69年は新聞研究所副所長を兼務された。1973年から77年の4年間、生田先生は新聞研究所の所長として研究所の発展に尽力された。その前後の時期といえば、生田先生が慶應義塾常任理事、法学部長などの役職で大学行政に深く関与され、慶應義塾を支えていらっしやう。そして1987年、生田先生は慶應義塾を退職なさった。丁度わたしが学部を卒業する時期に重複していた。

生田先生の活躍の場は義塾内に留まることはなかった。日本のマス・コミュニケーション研究の草創者の一人でもある。日本新聞学会（現日本マス・コミュニケーション学会）や情報通信学会の立ち上げでも中心的な役割を果たされた。1979年から83年までは日本新聞学会会長、1996年から2000年までは情報通信学会会長を務められた。政策の世界でも幅広く生田先生はご活躍であった。1975年から77年は総理府広報研究会座長、1978年から80年にかけて国際コミュニケーション政策会議組織委員長、1983年には世界コミュニケーション年国内委員、1991年から95年にかけては郵政省（現総務省）電波監理審議会会長の要職をこなされた。こうした業績は高く評価され、1991年には電波の日郵政大臣賞、1996年には財団法人逓信協会前島賞を受賞され、そして2000年には勲二等瑞宝章を受章された。

わたしにとって、生田先生といえば新聞研究所、新聞研究所といえば生田先生であった。わたしは直接ご指導を受けたことはなかったものの、同期の友人や現在の同僚、そして綱町三田会の先輩方からは生田先生にまつわる幾つもの逸話を耳にしてきた。そうした逸話のなかの生田先生は近寄りたがたい偉人であった。ご縁があって、その偉人の築き上げてきた研究所を現在わたしは任されている。偉人の遺志をつなぐことで、ますます研究所を発展させていきたいとの思いを強くしている。

生田先生、どうぞ上からわたくしたちの歩みを見守ってください。

(2013年12月5日)

山本信人（メディア・コミュニケーション研究所長、法学部教授）



惜別の辞

大石 裕

生田正輝名誉教授・元新聞研究所長がご逝去されてから約2カ月経った、2012年7月2日、帝国ホテルで「偲ぶ会」が執り行われた。この会では、浜田純一東京大学総長、滝鼻貞雄元読売新聞社社長、鶴木真元慶應義塾大学教授といった故人と縁のある方々が、生田先生のお人柄と業績をたたえ、お別れの言葉を述べた。その後、清家篤慶應義塾長の発声により献杯が行われた。会場には勲章を胸に誇らしげな先生の写真が飾られ、献花を行う人の列が長く続いた。先生を悼む、あるいは感謝する声が各所から聞かれ、最後に文子夫人から深甚なる謝辞が述べられ、「若き血」が流れるなかで散会となった。

生田先生の社会的な活動、それに対する高い評価は、「偲ぶ会」でのこうした言葉や新聞紙面などでかなり尽くされたと思うし、私自身『法学研究』の追悼論文集（86巻、7号：2013年7月）の「序文」で先生のいくつかの思い出を語らせていただいた。そこで、ここでは先生の研究を中心に述べることにしたい。

先の『法学研究』では、生田先生の研究業績が掲げられている。それを見ると、先生がマス・コミュニケーション論、ジャーナリズム論、コミュニケーション論、情報社会論といった、実に多様な領域において多くの著書や論文を発表し、さらには翻訳を手がけられていたことがわかる。対象としたメディアは、新聞、ラジオ、テレビ、映画、そしてニューメディアであり、扱ったテーマもメディアの倫理、言論の自由、世論（過程）、オーディエンス、メディア産業、知識人や教育、時事新報などである。その際に拠って立った既存の研究分野も、政治学、社会学、社会心理学などきわめて多彩である。

このことは、生田先生がマス・コミュニケーション論など当該の研究分野において、まさに先駆者であったことを物語っている。それと同時に、学部や大学院時代に様々な研究領域の文献を渉猟されたことの証左とも言えよう。加えて、マス・コミュニケーション論という、言わば後発の研究領域を開拓し、根づかせるという仕事に生田先生がいかに傾注されていたかを示すものという評価も十分可能である。

生田先生がお話される場合には、「進歩的知識人」の言動に関しては批判的であったとの印象が残っている。それはおそらく、私だけではないだろう。しかし、上述の研究成果に触れると、そうした思いは底流にはあったかもしれないが、筆の運びがきわめて慎重であり、とくに先行研究を重視しながら論を進めていったことがわかる。研究の国際交流にも熱心であった。研究者としての先生は、研究の重要性を認識するとともに、その怖さ、難しさといった思いを終生持ち続けていたと言えるであろう。

それは研究以外の評論活動、たとえば産経新聞紙上に10年にもわたって執筆された「マスコミ論談」をまとめた、『新聞を斬る』（サンケイ出版）、『新聞報道のあり方—その問題点を衝く』（慶應通信）を読んでも同様である。先生はこれらの本のなかで、型通りの批判に終始する新聞、そして他者に厳しく、自らに「甘い」新聞を問題視することに主眼を置いていた。そこで展開された主張は研究書よりも確かにいくぶんかは大胆ではあったが、いくつかの新聞を読み比べつつ、かつ新聞ジャーナリズムの問題の核心を衝こうとする姿勢は一貫していた。

今、メディア・コミュニケーション研究所を中心とする、慶應義塾のジャーナリズム研究が行うべき課題は、先生の問題意識を継承しつつ、ジャーナリズムがそうした報道を繰り返すことの事由に関して様々な角度から調査し、分析を行い、有益な知見を提示することであろう。もちろん、昨今の高度な情報通信技術の影響も考慮に入れながら。先生の訃報に接してから、約1年半の月日が流れた今、私はこうした思いを改めてかみしめている。

生田先生、長い間のご指導ありがとうございました。安らかにお眠りください。

(2013年12月3日)

大石 裕（慶應義塾大学法学部長、前メディア・コミュニケーション研究所長）



生田先生を偲ぶ

久保崎喜太郎

思いがけず、生田先生が享年 89 歳で旅立って逝かれました。心より先生に哀悼の意を表します。

生田先生と僕のご縁の始まりは、僕が日吉から三田に進学し、新聞研究室に入室させていただいた 1953 年（昭和 28 年）の新学期からでした。その後、幾多変遷の時を経て、先生の晩年まで親しくご厚誼いただいたことを、今は深く感謝しています。

三田に進学した僕は、新聞研究室の授業を受講すると共に、実習の「慶應義塾大学新聞」作りにも参加しました。以来、生田先生には、時に先生として、又、時に先輩として、いろいろと親しくご指導をいただきました。

当時の新聞研究室の先生方は、新聞社の現役のベテランの方々でしたから、授業は実務に即したお話が多く、将来マスコミへ就職希望の僕らは、諸先生の授業を熱心に受けました。

「新聞原論」を講義された生田先生ご自身も慶應義塾の助手時代、時事新報社へ内地留学された経験がおありで、永田記者倶楽部で首相官邸の当番記者をされた頃の体験談を交えてお話をされることもあり、当時は新進気鋭の先生の授業を興味深く聴講させていただきました。

あの頃を振り返ってみると、当時の授業は、即、実務に通じる授業だったと思います。当時の先生方や教室の様子は、今も懐かしく思い出します。

当時は、まだ研究室が発足して間もない頃でしたが、研究室の実習紙、「慶應義塾大学新聞」の塾内における活躍もなかなか盛んでした。

生田先生を始め、当時の研究室の諸先輩は、機会ある毎に実に親身になって我々後輩の面倒を見、指導してくださいました。卒業後も研究室の催事にはよく出席して下さったので、今でも親しく先輩と付き合い合っています。

戦争という大変な経験を経てこられた諸先輩にはどなたにも、気骨があって、心やさしく人情に厚い、心温かなものを感じていました。それは、生田先生を始め当時の研究室の諸先輩が、多感な青春時代に太平洋戦争と遭遇し、戦線や国内で言語に絶するような過酷な戦争体験を経てこられたからだろうと推察しています。

普段、生田先生はそのような話をされることはありませんでしたが、その経験が根底に在って、先生ご自身も、生涯を力強く生き抜かれたのだらうと思っています。

塾を卒業後、朝日放送に勤めた僕は、1968 年（昭和 43 年）頃、塾生の当社への就職の件で、三田を訪ねたことがあります。当時、三田山上の塾舎のあちこちに机や椅子でバリケートが築かれている情景を見て愕然としながら、塾の状況を大変憂慮したことがあります。

生田先生は、この紛争直後の 1970 年（昭和 45 年）から、塾の常任理事として行政職に就かれ、全塾的な大学改革の任に当られたということですが、当時の先生は大変ご苦労されたことと思います。

僕は三田へ進学して、新聞研究所で学ぶと同時に、社会学を「米山桂三ゼミ」で学びました。このご縁で、当時の米山先生、生田先生、それに当時大学院生で研究室の先輩だった十時巖周先輩にも親しく接していただく機会に恵まれました。お陰で、尊敬する先生や先輩に直に接し、親しくその教えを受けられるという機会に恵まれ、実り多く豊かな塾生時代を送ることができたのは幸運でした。今でもその出会いに感謝しています。

生田先生は、僕が放送業務に携わっていたこともご存じだったので、日本新聞学会、情報通信学会、電波監理審議会などで会長を務められ、ご活躍されたお話もいろいろと伺わせていただきました。マスコミ界の広範囲の分野に貢献されたことを知り、感服し尊敬の念を強くしました。

幸いにも、2006 年（平成 18 年）3 月に先生を囲み、交詢社で「新聞研究所設立 60 周年」をお祝いできたことを喜んでます。

久保崎喜太郎（1955 年（昭和 30 年）法卒 元朝日放送）



「メッセージ@ pen」にみる血流

望月一雄

メディア・コミュニケーション研究所と綱町三田会の共同編集の慶應義塾創立150年記年誌「メッセージ@ pen」が2008年（平成20年11月）に完成し、翌年2月14日「同出版を語る会」が交詢社で行われた。このプロセスを考えると、生田正輝慶應義塾大学名誉教授のライフミッションの中には新聞研究室（1946年10月発足）から、綱町三田会（1950年3月発足、今日に至る）まで一貫して慶應義塾社中のジャーナリズム学を軸にした人間開発があったと思う。この生田イズムの底流には“寄付文化”の導入によって、メディア関連企業がもつ現場哲学と国際性を学ぶ道筋があった。当時の新聞研究所（1961年3月名称変更）に放送三田会寄付講座として1962年放送講座の開設も“方今至急の要務”だった。

これは従来の新聞・雑誌の紙メディアに、新たにわが国に於いて電波メディアを学問大系として構築した点に意義があり、「所史稿本」（1985年6月発行、新聞研究所）や、「秘史」（中川順著、講談社）に見られるが、その後の寄付講座として、朝日新聞、フジテレビ、そして電子メディアとしてNTTが続く導火線となった。また新聞研究所主催国際セミナーの開催（1983年）などの国際性にも腐心した。

話を「メッセージ@ pen」に戻そう。その「同出版を語る会」で生田名誉教授は冒頭の挨拶の中で、「私は化石のようになったが、こうして研究所と綱町三田会が一体となって、塾150周年記念として、「メッセージ@ pen」が完成したことが喜ばしい。然も綱町三田会179名、168万3千円の協賛。これを使途指定寄付として塾へ寄付すること自体、新しい文化ではないか」と述べた。

その編集実務を担当した亀井洋二君（昭和35年経卒）、甲本仁志君（昭和35年文卒）、山本正郎君（昭和35年文卒）、高野英男君（昭和38年商卒）、箆絃矢君（昭和39年法卒）と望月一雄（発行責任者、昭和33年経卒）の編集6人衆。尾中信明君（昭和34年経卒）、船津於菟彦君（昭和36年法卒）他13名の編集委員の協力で、会員から98本の原稿が集まった。まさに「丘の上90年（研究室発足が塾創立90周年）、そして150年」の一貫編集が結実した。新聞研究所所長在任中（1973年10月～77年9月）にふれて「今日に至るまで、ジャーナリスト、マスコミ人の養成に重点を置くか、マスコミュニケーションに関するアカデミックな研究に力点をおくという事は、一貫して論じられてきた課題である。しかしながら、研究所の基本的な性格は、この綱町時代に形成されたといわなければならない。」（「メッセージ@ pen」と発足当時の辛・苦・楽を記述している。多事争論（1875年「文明論之概略」巻之一）の多元主義的発想を連想するが、大学紛争という時代背景もあって研究所と綱町三田会との連携が薄れた。

この事態を憂いて昭和35年、36年組を中心に有志が“活性化”にむけて立ち上がった。諸先輩のアドバイスを参考にしてこの連携強化の一点。2001年1月に臨時総会を開催。名誉会長生田正輝、会長関根正美（研究所所長兼任制）、代表幹事望月一雄、副代表幹事船津於菟彦及び会則規約の一部改正で当面スタートした。

蘇生、綱町三田会運営費は会費制の検討もあったが、結局“寄付文化”の導入で会員対象に研究所と綱町三田会の5年ごとの周年事業として、第1回は、「綱町三田会50周年寄付」（2001年実施）で、爾来、今日まで継続中である。生田正輝名誉教授が、「私学である以上、寄付はエネルギーの源泉」と毎年3月実施の修了生・OBOG懇親会の席上挨拶していたことが耳新しい。

現・代表幹事 瀬下英雄君と副代表幹事委員で、電子版ジャーナル誌「メッセージ@ pen」が毎月発行され、会員及び研究生間の血流になっている。その奥底に「社会のなかの個人、個人のなかの社会」（パネルディスカッション・ニュースを読む力、学問のすすめ21、vol.13大石裕・当時所長）という言葉が日々の行動価値観の示唆に富む。

望月一雄（1958年（昭和33年）経卒 元横浜ゴム）